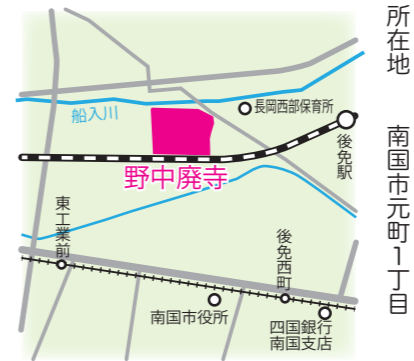


新発見!

野中廃寺の謎の古代寺院

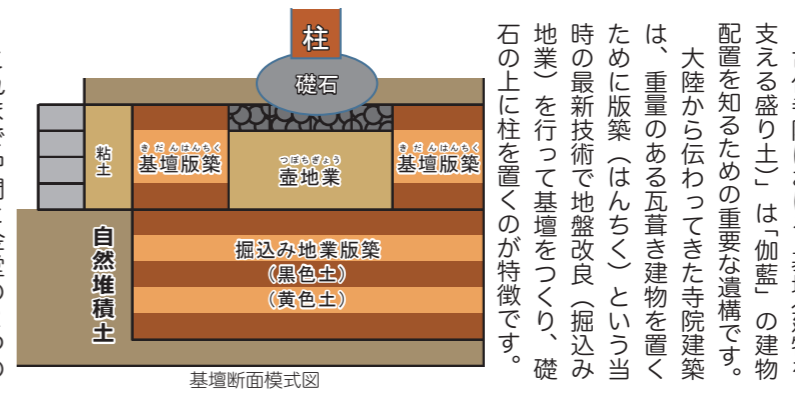
これまで謎の古代寺院とされてきた「野中廃寺」。このたびの発掘調査で、7世紀後半(約1350年前)の白鳳時代に創建し、法起寺式という建物の配置(伽藍(がらん)配置)であることが判明しました。土佐の古代史の大きな謎が解き明かされた成果をご紹介します。

現地説明会
7月11日に、現地説明会を開催し、約120名の方が遺物の展示と遺構の説明に熱心に耳を傾けていました。



野中廃寺とは
野中廃寺は、江戸時代の歴史書に既に古代寺院として紹介されていましたが、創建年代や建物の配置(伽藍配置)など詳しい内容はほとんど分からず、謎の古代寺院とされてきました。

調査成果
◎新たに2つの基壇(きだん)を発見し、県内で初めて伽藍配置が判明。寺院を形成する主要な建物のことを伽藍といっています。



これまで中門と金堂の2つの基壇しか知られていなかったため、謎の建物配置と思われていたが、新たに2つの基壇が見つかったことで、「法起寺式(ほつきじき)」という伽藍配置であることが判明しました。新たに見つかった基壇は上部が削られています。

た地盤改良の範囲でおおよその基壇の規模を知ることができました。また、特徴からそれぞれ講堂と塔の基壇と判断しました。講堂基壇は創建当初の規模が東西約29m、南北約17mあり、かなり大きい建物だったようです。塔基壇は1辺約12mの大きさです。礎石などは残っていませんが、瓦がまわって出土した範囲

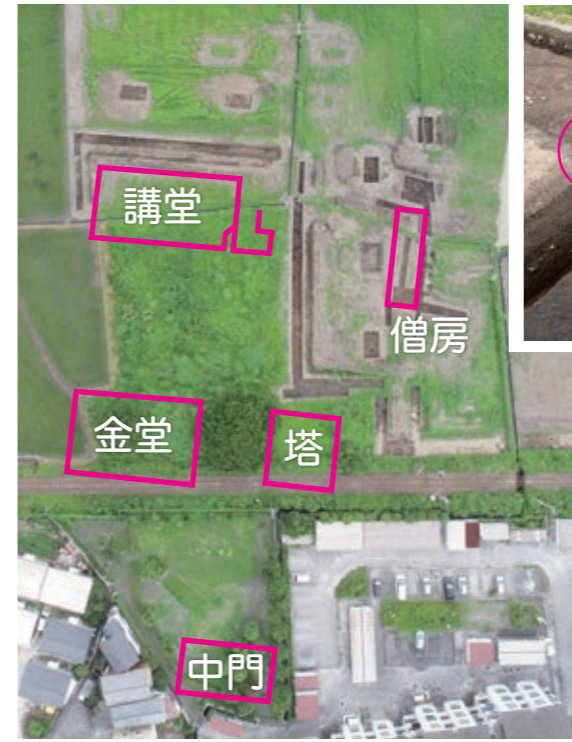


塔基壇と柱痕跡

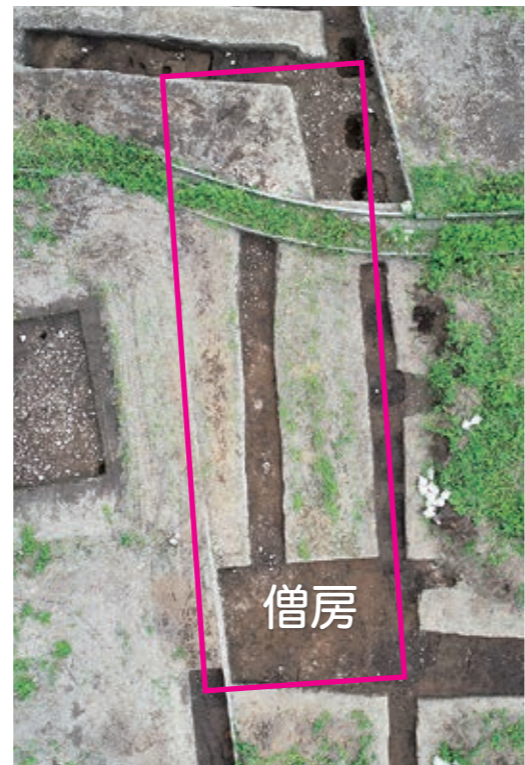
の位置関係で柱の配置が推測できます。金堂基壇は現在唯一上部が残る基壇であり版築の土層も最も良好に残っています。



金堂基壇版築土層



建物の配置(伽藍配置)



◎大型の掘立柱建物跡を確認
講堂の東側から新たに南北棟の大型掘立柱建物跡を確認しました。建物面積は約124㎡にもなります。

建物の方位は基壇の向きに合せて建てられています。また、硯(すずり)に転用された須恵器のふたが出土したことで、僧侶など文字を書ける人物がいた施設であることが分かります。このことから、僧が生活する施設である僧房の可能性が高いと思われます。

◎出土遺物から、寺院の存続時期や瓦などが判明
軒瓦や多くの土器などが出土

したことで、いつの時代に建てられたかが分かってきました。土器の年代から、7世紀後半の白鳳時代に創建し、奈良時代に最も栄えて、平安時代の10世紀頃に使われなくなったと考えられます。

今回出土した特筆すべき遺物は、「二彩陶器(にさいとうぎ)」「鉄鉢型須恵器(てつぱつがたすえき)」などです。二彩陶器はこれまで県内で出土した遺跡が2カ所しかない特別なもので、今回出土したものは大型の壺や瓶と考えられます。講堂の近くから出土したことから、講堂に安置されていたのでしょうか。

鉄鉢型須恵器は、僧侶の修行や食事などに使う鉄製の鉢(鉄鉢)の形をまねた須恵器で、主に寺院関係の遺跡で多く出土します。



二彩陶器(にさいとうぎ)

また、出土した軒平瓦(のきひらがわら)の文様は県内のみならず県外の古代寺院をみても類例が見つからないもので、更なる調査・研究により野中廃寺の系譜や存続時期の特定に繋がる可能性があります。



軒平瓦(のきひらがわら)

◎まとめ

今回の調査で新たに2つの基壇を発見し、法起寺式の伽藍配置であることが判明したことは画期的な成果と言えます。これにより都の寺院建築に関する当時の最新技術を、積極的に取り入れて建立していることが分かります。それは大化の改新後、都を中心とした国づくりに土佐がどのように組み込まれていったかを知ることにもつながっていきます。

野中廃寺から南西に約500mの位置には、若宮ノ東遺跡があり、近年の発掘調査で7世紀後半の役所の建物跡が見つかりました。

7世紀後半という同じ時期に出現した寺と役所の2つの施設からこの地域の有力者の存在が見えてきます。

現在の行政区画の礎が築かれた古代。その時代に出現した寺院や役所の遺跡の解明によって、激動の時代をどのように生き抜いたか、私たちのルーツを知ることになります。

◎おわりに

調査にあたっては、開発事業者および地権者の方をはじめ、多くの方々にご多大なるご支援・ご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

今後とも文化財調査へのご理解・ご協力をお願いいたします。なお、今回紹介した成果の詳細を記した現地説明会資料を、文化財係(南国市立田405)や市役所3階生涯学習課で配布しています。

■問い合わせ
教育委員会生涯学習課文化財係
0802・6062

